相

第 47 号

発行所

〒157－0066

東京都世田谷区成城1－13－1

武蔵工業大学付属中・高等学校内

電話　03－3416－4161

発行責任者　阿部俊夫

編集責任者　清水茂

校名変更について

同窓会会長　阿部　俊夫

十四期（昭和四十二年三月卒）

同窓会会員の皆様には誠に遺憾なことでありましょうが、母校名称が『東京都市大学付属中・高等学校』に変更となることが決定いたしました。

同窓会理事会として『むさこう（ムサコウ）』を残したいとの思いで、学校長に育英会での対応を依頼しておりました。（同窓会には校名変更の議論の場への参加が認められておりませんでした）五島育英会で昨年十月末に武蔵工業大学と東横学園短期大学を合併し、大学の新校名を東京都市大学とすると決定されてしまいました。従って、付属である現実を拭い去れない以上、新校名に準拠せざるを得ない状況となりました。

校名変更について本年四月から学校側より『校名変更について同意書』の提出を求められてまいりました。同窓会理事会としては

①一万人を超える会員の皆様との連絡の糸を切らない。

②活動費の大半を占める入会金を継続的に確保する必要がある。

③今回の戦犯は五島育英会である。

等の議論の中で、同窓会組織を継続するため、書面の提出には応じざるを得ないとの結論に達し、左記の文書を提出いたしました。

文書は二種類作成いたしました。『容認書』は学校側より求められておりました『同意書』に対応するものです。同窓会理事会として書面の提出には応じるものの、あくまでも『同意』では無く、仕方ない状況で『容認』するという意味です。『意見書』につきましてはこのような状況に到った五島育英会の責任を問う意味で提出いたしました。

会員の皆様には多大な不満があることと推察いたしますが、現状を考慮し、今後とも同窓会活動にご理解とご協力をいただきますようお願い致します。

本年度の総会・懇親会は

日時　2008年11月14日〈金〉
午後7時より第33回総会　午後7時30分より懇親会

本年の総会では巻頭の記事でもご報告いたしました「校名変更」に関しての報告があります。永年親しんできた校名が変わることは同窓会としては断腸の思いであります。同窓生も各人様々なご意見があるのではと察するところです。厳しいご時世ではございますが、お互いに親交を深めたいと思います。

是非のご参加をお待ち申し上げます。スケジュール表に今すぐメモして下さい。

会場　渋谷・エクセルホテル東急〈渋谷マークシティー内〉
6Fプラネッツルーム　TEL 03-5457-0109

会費　5,000円（食べ・飲み放題）

（注意）会場はエクセルホテル東急へと第26回総会より変更となりましたのでお間違えのない様に！是非、同級生や先輩、後輩に連絡して誘い合わせてご一緒にどうぞ。

本校卒業生 吉目木晴彦氏の特別講演会のお知らせ

芥川賞作家（平成五年受賞）である吉目木晴彦氏（23期　昭51年卒）が本年の武蔵工大学園祭［MY―TECH際］にて講演されます。

●講演内容：
「ムサ校に学んで―理科と文科の知際」
知際は学際・国際からの造語です。

●講演日時：
平成20年11月22日（土）
15時00分受付開始
15時30分～17時00分講演

●講演場所：
武蔵工大内特別講堂（尾山台）

●主　催：
柏三水会

尚、講師のサイン入り著書も販売される予定です。

＊柏三水会とは約30年の歴史を持つ武蔵工大（関係学校を含む）出身者の経営者の団体です。

手塚貴晴（二十九期生・昭和五十七年三月卒）氏、二〇〇八年『日本建築学会賞』授賞に輝く！

手塚貴晴（現武蔵工業大学准教授）氏の建築設計作品＝ふじようちえん＝が、本年度の〝日本建築学会賞〟を受賞。次号「柏」48号には、彼の講演内容を素に〝特集〟の予定です。

学校法人　五島育英会理事長　　2008年（平成20年）8月26日
山口　裕啓様
武蔵工業大学付属中学校・高等学校長
五十嵐　勲様

武蔵工業大学付属中学校・高等学校同窓会　会長
阿部　俊夫

校名変更についての意見書

本会としては、中間報告を受け公表もされた「武蔵都市大学付属中学校・高等学校」であれば反対する意図はございませんでした。

「東京都市大学付属中学校・高等学校」では「むさこう」の呼称を残すことは現状として不可能となった事態を厳粛に受け止めております。
さらに、新校名への変更に関して必要且つ十分な説明が学校法人五島育英会及び学校側から行われたとの認識はございません。

卒業生が活躍している実社会においても、校名及び「むさこう」の呼称を継承する卒業生が今後輩出されない状況は学校法人五島育英会にとっても、またタテ社会の実業界においてもマイナス要因に他ならないと信じて疑いません。

しかしながら、学校法人五島育英会が関連諸団体等への届出前に先んじて、新大学名・東京都市大学及び法人設置の各学校の名称変更を既に新聞全国紙等を通じて公衆閲覧している状況を鑑みると、当会が反対意見を提言してもそれは叶うものではないという現実を容認せざるを得ないとの結論に達しました。

以上

学校法人　五島育英会理事長　　2008年（平成20年）8月26日
山口　裕啓様
武蔵工業大学付属中学校・高等学校長
五十嵐　勲様

武蔵工業大学付属中学校・高等学校同窓会　会長
阿部　俊夫

校名変更についての容認書

本会としては、中間報告を受け公表もされた「武蔵都市大学付属中学校・高等学校」と異なる名称が新たに公表されたことについては、大変遺憾に感じており、新校名については反対するものです。

しかしながら、学校法人五島育英会が新大学名を東京都市大学及び法人設置の各学校の名称変更を既に新聞全国紙等を通じて公衆閲覧している状況を鑑みると、「武蔵工業大学付属中学校・高等学校」という由緒ある校名を「東京都市大学付属中学校・高等学校」に名称変更することは、心情的には耐え難いが、やむを得ず容認致します。

以上

《公示》同窓会総会開催について

第33回総会を下記の要領にて開催いたします。同窓会会員(卒業生)は是非ともご出席お願いします。

本年もまた、目まぐるしく一年が過ぎようとしております。バブル崩壊後の経済は、今だに重苦しい状況下に置かれていますが年に一度の同窓生の集まれる機会です。総会後の"懇親会"では情報交換、今後の人生の糧となる交流をしましょう。先輩方・後輩方との利害のない親交は特に貴重です。

記

日　時　2008年11月14日(金)午後7時00分より

場　所　渋谷・エクセルホテル東急　6階プラネッツルーム

議　題

1号議案　2007年度(2007年10月1日～2008年9月30日)活動報告

2号議案　2007年度(2007年10月1日～2008年9月30日)決算報告

①一般会計報告

②名簿関係収支報告

③第32回総会決算報告

④繰越金内訳

⑤会計監査報告

3号議案　2008年度(2008年10月1日～2009年9月30日)活動計画

4号議案　2008年度(2008年10月1日～2009年9月30日)予算案

5号議案　役員改選　6号議案　「校名変更」の経緯について

7号議案　その他

懇親会のご案内

総会終了後、同一場所において懇親会を開催いたします。週末の夜、仕事を離れ、懐かしい友や先生方とホテル自慢のフルコースとお酒を楽しみながらひとときを過ごしてはいかがでしょうか。お仕事の都合で総会に間に合わない方でも歓迎いたします。お互いに声を掛け合ってください。

日　時　総会終了後(7時30分開会予定)

場　所　総会と同じ場所(楽しい企画を楽しんでください)

会　費　巻頭ページ参照(飲み・食べ放題)

＊参加者をさらに増やしたいと願う私たち事務局の意向に是非ご協力ください。

理事会報告

副会長　梅田　博夫
(十六期)

本年度は、臨時・緊急を含め七回の理事会、四回の三役(会長・副会長・事務局長)会を開催いたしました。

本年度の特徴としては、①学校側要請により初めて入学式に出席。(学校側と協議の結果来年度以降も出席)《中学校入学式(神田事務局長)、高校入学式(梅田)》②企画委員会関連活動として母校PTAとの協調活動実施(今後も継続していきます。)があります。

その他としては、年間スケジュール作成、柏発行関連、球技大会・柏苑祭等への対応、卒業式出席(阿部会長)等例年の活動を除くと、『校名問題に関する対応』が理事会活動の大部分を占める事となりました。

昨年度、我が同窓会理事会は、「武蔵都市大学」にて決定する(『むさこう』が残せる)と判断し静観の態度をとっていました。その後、我々の意に反して「東京都市大学」と正式決定されてしまいました。

この事態を踏まえ緊急理事会開催、意見集約等の対応を経て、次善の方法をと考え、学校側との折衝を行いました。会長の巻頭記事の如く提出文書をまとめる為、母校・学校長と同窓会三役との直接面談打合わせも四回に渡りました。今まで、ややもすれば希薄であった両者の協力関係を再構築するため、互いに相手に対し、どんな協力ができるのかを具体的に打ち合わせ致しました。

今回の「校名変更問題」を良薬(は口に苦し)と考える事にして、両者の友好関係を深める事が出来たと考えます。

昨今、職責の取り方を間違えている各界の責任者が多く見られます。その上で、今期役員改選期を迎え、前述の如く母校との関係も良好な方向に向かえる道筋を作れたこの機会に、会長・副会長三名は、辞任する事と致しました。三名は今後も理事として頑張りますので、よろしくお願い申し上げます。

第32回 総会報告

総会日時：2007(平成19)年11月16日(金) 19：00～　会場：渋谷エクセルホテル東急

2006年度(2006年10月1日～2007年9月30日)活動報告

'06. 11. 4･5　柏苑祭参加(第48回)＝新校舎＝
'06. 11. 10　第31回総会　於 渋谷エクセルホテル東急6階プラネッツルーム
　第1号議案～第5号議案　全て原案通り承認されました。
　懇親会　於 渋谷エクセルホテル東急6階
'06. 12. 1　第1回理事会
　①母校新校長赴任　②柏苑祭反省会
　③「柏」45号発行準備
'07. 2. 1　第2回理事会　①卒業式の件　②校名変更の件について
'07. 3. 1　高校卒業式に出席
'07. 3. 5　『柏』45号発送　2,128通
'07. 4. 5　第3回理事会　①校名変更の件について　②その他
'07. 6. 7　第4回理事会　①校名変更の件について　②ゴルフコンペ状況
'07. 6. 30　新校舎落成披露記念式典出席
'07. 8. 2　第5回理事会　①校名変更の件について　②「柏」46号発行準備について
'07. 10. 4　第6回理事会　①柏苑祭準備　②総会準備・議案確認　③校名変更の件について
'07. 10. 25　『柏』46号発送　8,500通

2006年度(2006年10月1日～2007年9月30日)決算報告

一般会計報告(収入の部)

科目	予算	決算	内訳
入会金	750,000	831,000	54期生277名
年会費	1,500,000	1,230,000	54期生277名，その他133名
引継金	4,721,546	4,721,546	前期より
雑収入	1,000	3,622	預金利息他
合計	6,972,546	6,786,168	

一般会計報告(支出の部)

科目	予算	決算	内訳
会議費	120,000	82,999	理事会6回
交通費	100,000	78,000	
総会費	200,000	226,525	
『柏』制作費	30,000	17,296	
通信費	1,000,000	847,930	『柏』44号(@80 × 8,030)『柏』45号(@80 × 2,128)他
印刷費	700,000	673,834	『柏』44号(9,000部)『柏』45号(9,000部)他
発送アルバイト費	200,000	125,000	『柏』44, 45号発送アルバイト
事務費	40,000	22,073	
事務局活動費	200,000	0	
同窓会賞費	80,000	50,000	
小委員会費	25,000	1,340	
名簿整備費	50,000	30,000	名簿管理アルバイト
柏苑祭費	30,000	26,714	
HP制作費	200,000	210,420	
会員交流補助費	40,000	0	
名簿会計清算	493,003	493,003	
予備費	100,000	117,629	新校舎竣工式後の懇談会他
繰越金	3,364,543	3,783,405	
合計	6,972,546	6,786,168	

名簿会計決算報告

科　目	収入額	支出額	内訳
前期より繰越	－493,003		
一般会計より	493,003		
次期繰越金		0	
合　計	0	0	

第31回総会決算報告

科　目	収入額	支出額	内訳
会　費	62,000		@4,000×8+@10,000／3×9
景品他		48,653	
懇親会費		239,872	
総会援助金	226,525		
合　計	288,525	288,525	

繰越金総額

一般会計繰越金	3,783,405円
名簿会計繰越金	0円
合　計	3,783,405円

繰越金内訳

定期預金口座	640,055円
貯蓄預金口座	271,971円
普通預金口座	379,698円
郵便振替口座	1,838,788円
現　金	652,893円
合　計	3,783,405円

上記の通り2006年度会計報告を致します。

2007年11月16日　　会　計　上島　正義 ㊞
今井　章久 ㊞

会計監査報告

上記、会計内容を監査の結果、正しく表示、掲載されていることを認めます。

2007年11月16日　　会計監査　白井　康雄 ㊞

2007年度(2007年10月1日～2008年9月30日)予 算 案

収入の部

科目	予　算	内　訳
入会金	750,000	55期生250名
年会費	1,500,000	55期生250名その他250名
引継金	3,783,405	前期より
雑収入	1,000	預金利息
合　計	6,034,405	

支出の部

科　目	予　算	内　訳
会議費	120,000	理事会6回
交通費	100,000	理事会
総会費	200,000	総会援助金
『柏』制作費	30,000	編集委員会2回
通信費	1,000,000	『柏』46号(@80×8,000) 47号(@80×3,000)他
印刷費	700,000	『柏』46号9,000部¥300,000 47号9,000部¥200,000 封筒他
発送アルバイト費	200,000	『柏』発送アルバイト
事務費	40,000	
事務局活動費	200,000	
同窓会賞費	80,000	
小委員会費	25,000	
名簿整備費	50,000	名簿管理アルバイト
柏苑祭費	30,000	
HP制作費	500,000	
会員交流補助費	40,000	武蔵クラシック補助
予備費	100,000	
繰越金	2,619,405	
合　計	6,034,405	

一期一会（2）

鈴木　威一
九期生（昭和三十七年三月卒）
一期一会　代表世話人

皆さんに知ってもらいたいと、前回の会報で私が主宰している一期一会の会で武蔵校同期の服部米国弁護士のことを書いたが、好評で？　事務局より一期一会についてもう少し書くように依頼を受けました。

団塊の世代の後輩たちも退職時期を迎えるので、今回は何故私が一期一会の会を始めたかについて、厚顔を省みず　少し詳しく書いてみます。

私が六十歳を迎え、その月末でほぼ五年前定年退職となった。その時点では比較的恵まれた地位になっていた私にオランダ人の社長は関連会社への再就職を斡旋してくれると言う。

有難いとは思いながら、六十歳以降の人生を人のお世話に成りながら仕事をする事に自分の生き方の上で強い抵抗感があり、無謀にもお誘いを断り、自分で会社を設立してしまった。

その時、折角仕事人生を終え第二の人生の機会を授かったのに、又困難な仕事を選んでしまったそんな自分に対して、これで後悔は無いのかと言う自問自答も沸いておりました。

私にとっての　定年以降の仕事の目的は、

1、生活の糧を得る手段
2、自分のやりがい・生きがいを持ち続ける手段

の二つであると考えました。しかしこの1と2は実は中々両立しないのです。そうで有れば、仕事とは別に、人々の為になり、今までの人生の恩返しをすることが出来る事を始めたいと考えました、しかし具体策は無く、自分の趣味や楽しみを幾つか並行して深める日が暫く続きました。

そんなある日、大学の同期生の集まりがあり出席しました。しかしその場は全く私の期待に反した物でありました。飲むほどに社会で立身出世した人が誇らしげであり、声高に自分の出世を述べる人、いかに会社の金で遊んだかを述べる人、そんな友を羨ましげに褒める人（本心とは思えないが）などが目立つ会でありました。そして、唯一皆の息が合うのは後輩や今の若者達の不甲斐なさや悪口でした。

そんな中で無口になっている私に『鈴木も成功談を語れ』と促す友までが現れた（客観的には数十万人の部下を持つまでになった小生は出世組なのだろう）。友人の私を思う気持ちはありがたいのだが、しかし私はその時は吐きそうな程この場に居る事が嫌になっていました。

出世がその人の全てではなく、同窓会の場は色々な人生を送った人が平等に楽しむ場であると思って自分は出席していた。

自慢話は未だ容認できるのだが、人の悪口は如何しても生理的に受け付けない青臭い自分を、もう一人の自分が見ていた。

そしてその日を機に『俺は人の悪口はそれが事実で有ってもあえて言わないようこれまで生活してきた。それを変える事はしないが、しかしこれだけでは世の中は良くならないので、これから私は態度で示そう。不満なことや変えたいことがあれば、口で言うのでなく　何か行動を起こす。そして一人でもその行動から後輩たちが何かを感じてくれれば、大げさに言えばわが国の将来に幾らかでも小さな貢献が出来る』と考えたのです。

当時には若者が信じられないような事件を幾つも起こし世の中を騒がせていました。

将来に希望が持てない若者も多く、今の若者は先輩達の話を聞く機会が無い事を再確認しました。

そして終戦後我々熟年世代がやってきた事実を本人がお話しすると言う形で、何かを色々な人に伝承できたらと、小人数の交流会を思いついたのです。

今から数えると約四年前にそんな主旨で、三ヶ月に一回の頻度で始めたのが〝日本を良くする会・一期一会〟なのです。一年ぐらい続けば良いと言うつもりで始めたのですが、継続の要望が多く、なんと四年以上も継続しています。

〝一期一会〟と言う会の名前は、当時大学四年生であった私の次男が『日本を良くする会』ではダ

サいので、私の好きな『一期一会』にしたらとアドバイスしてくれたので、それを使ったのですが、この名前は今でもとても気に入っています。

現在は講演会と交流会の二部制で毎回五十～六十人。参加者は学生・主婦・経営者を初め、八十歳超の人生の大先輩の方まで集まってくれています。

毎回の会の連絡希望者は現在九十人ほどと成っており、異業種交流の会としての役割も果たし始めています。

全て手作りの会ですので、事務局や当日の手伝いも家族やメンバーの方のボランティアで運営しています。

しかしながら質は何時も最高級を目指しており、素晴らしい講師(例えば前回講師は、西武百貨店、そごう両者社長を歴任された、米谷様。その前はシャープ筆頭副社長だった三坂様。同窓生の法学博士服部米国弁護士。イギリス人国際企業経営者。世界的タイ人ファッションデザイナーなど)と、素晴らしい場所(銀座)で僅かな実費の一部を出席者にもご負担戴いて開催しています。

これらの会員同士でも、新たな事業の構想や友情が生まれたりもしており、私としてもとても嬉しく思っております。

この様な会ですが、ご興味の有る方は、以下に示すアドレスに是非ともアクセスして下さい。過去の会の様子、次回の案内などをご覧いただけます。ホームページは、executive-consulting.j.com/iiです。

なお、事務局からのご要望が有れば、次号では評判の良かった会合の内容を少しご紹介したいと思います。

〝好奇心は限りなく・志は未来へ繋ぐ〟

山本　哲也

二十五期(昭和五十三年三月卒)

ゆるやかな坂をのぼって正門を通過、左に歩を進めると、左手に大きなグランドが目の前に現れた。〝ここで勉強するんだ〟。これが私の武蔵工業大学付属中高校(以下、響きが良く、馴染みのある〝ムサコウ〟と称したい)との最初の出会いであった。

わたしは、東京に今でも下町の風情が残る品川出身である。通った小学校は生徒数も施設面積も規模が小さく、おそらく全速力で走ったら(走れるかどうかはなはだ不安ではあるが)、カーブで曲がり切らないのではと容易に予想されるほど校庭が小さかった。

出会いには、驚きが伴う感動が必要である。特に上記、ムサコウとの出会いでは、グランドの規模の大きさからくる驚きだけではなかった。精神を図ることのない親からの独立といった驚きがあった。当日は初めてということで、母親と一緒にムサコウへ行った。しかし、その当日の記憶には、それまでとは大きく異なり、親の姿が見えない。成長とともに視界が広くなるが、その一方で、これを契機に記憶に登場する人物が大きく変わっていくのである。

人生にはいくつかの選択とその結果である出会いがある。自分の意志が多少なりとも伴う最初の選択は、中学校進学である。私は小学校からの推薦入学であり、それだけに入学が決まった後でのムサコウ訪問であったのである。高校進学、そして大学進学へと進む中で、選択主としての寄与はもちろん、年齢とともに増える。高校では、二者択一の理系、文系の選択があり、その後に具体的な大学志望校の選択がある。

ムサコウでは多くの先生そして友人との出会いがあった。中学での担任は3年間、大原完治先生であった。高校では井桁秀行先生、伊藤公徳(紀?)先生がご指導下さった。友人では、本誌編集に尽力している安藤友二氏との出会いがあり、今もなお、親交がある。

担任が物理学、数学の先生であったことに影響されたのか、私は大学(北海道大学、東北大学、大阪大学、現在は高知工科大学総合研究所(教授兼マテリアルデザインセンター長)では理学部を選択し、理論物理学に進んだ。学位も理学博士である。

中学2年であったかと思うが、理科第一分野での試験で、振り子に関する問いがあった。糸でつながれた重りをある高さまで手で上げ、その後、ゆっくりとその手を重りから離したときに、どの高さ

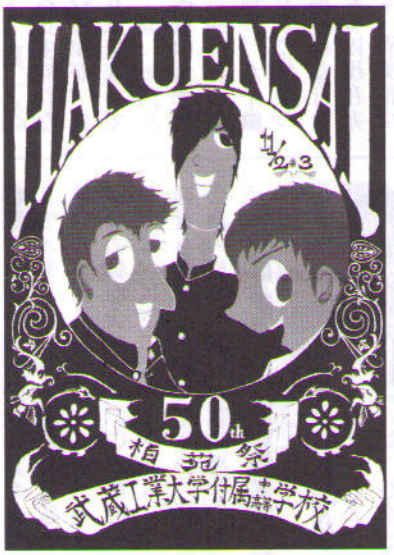
までその重りは上がるのかといった運動に関するものであった。選択問題ではなく、勝手なフォーマットでの返答が許されていた。ここが大原完治先生の狙いではなかったのか。理系試験には選択問題は不似合いである。

さて、上記問いに対する解答は、高校での試験であれば力学的エネルギー保存則からのものとなる。中学その当時、答えは遊びなどの経験上、造作なく用意されているものの、それをサイエンスとして証明することができなかった。プライドが許されず、その問いには白紙返答とすることを意志として選択し、万点を逃した。この選択が物理学、特に理論物理学との出会いをもたらした。上記、安藤友二氏は数学への選択、思いを貫いたが、彼とは成城学園前駅までの行程でよく話を戦わしたものであった。きっと彼にも大きな出会いがあったのではなかろうか。

十数年間ほどの企業での経験を活かし、大学に移ってからは、工学部としての研究開発を行っている。理論構築とその実証としてのものづくり、これら両方をカバーしている。産学連携ブームの中で、多くの企業研究者などとの出会いがある。その一方で先日、ムサコウの同窓会では楽しき先輩、後輩との出会いがあった。一期一会を大切とする鈴木威一氏との出会いにも恵まれた。

本誌読者にはムサコウ現役や今まさに大学への進学にかかる後輩もおろう。今後の選択と出会いとをぜひとも大切にして、志を全うしていただきたい。

最後に、明治時代の自由民権運動の理論的指導者であった植木枝盛の言葉を記したい。「胸中に志をもつもの、これを青年と云う」。



読売新聞　平成20年2月3日（日）掲載（抜粋）

希少金属　調達先を探せ

廃家電回収　新鉱床開発　代替品研究

家電製品などに含まれる金属類で日本は世界有数の資源国だと、物質・材料研究機構が先ごろ発表した。日本のハイテク産業を支える一方で、供給に不安がある「希少金属」（レアメタル）類をどう確保するか。国内でのリサイクルをはじめ、様々な取り組みが活発になっている。（三井誠）

主な希少金属の概要

金属の名前	2006年の生産量	主な用途	最近5年間の価格上昇率
インジウム	①中国 63% ②日本 12	液晶テレビ、太陽電池	約5.5倍
タングステン	①中国 85 ②ロシア 6	超硬工具	約4倍
マンガン	①南アフリカ 20 ②ブラジル 15	乾電池、アルミ缶	約4倍
プラチナ	①南アフリカ 77 ②ロシア 14	自動車排ガス触媒、燃料電池	約2.5倍
コバルト	①コンゴ民主共和国 38 ②ザンビア 15	特殊鋼、リチウムイオン電池	約5.5倍
希土類	①中国 98 ②インド 2	携帯電話、ハイブリッドカー	ネオジム 約6倍 ジスプロシウム 約5倍

（石油天然ガス・金属鉱物資源機構の資料をもとに作成）

サイエンス学び

「希土類」98%　中国に依存

希少金属　埋蔵量が少なかったり、特定の地域に偏在したりしている金属。生産国が偏っているため、その国の動向しだいで供給が不安定になる。ここ数年は、世界的な需要拡大などのため、価格が急騰している。研究開発のほかに、資源国との関係を強化することで供給安定を狙う資源外交も活発化している。

希少金属の確保で最後の切り札になるのは、代替品の開発だ。需要が急拡大しても、ほかの素材でしのげれば、問題ない。文部科学省と経済産業省は今年度、代替品開発に向け、12件の研究支援を始めた。

中でも注目される研究の一つは、高知工科大の山本哲也教授らが進めるインジウムの代替素材の開発だ。標的は酸化亜鉛。透明で電気を通す性質に加工できるため、液晶画面に使われるインジウムの代替品と期待されている。約30社にサンプルを提供、事業化への課題を探っている。製品として使うには、耐久性などテータの積み重ねが欠かせない。

山本さんは「資源が少ない日本がハイテク産業で生き残るには、資源国を圧倒する強力な研究開発力がカギを握る」と話している。

全面新築された母校で皆様とお会いしましょう！

第50回「柏苑祭」

日時　平成20年11月2日(日)・3日(月)

場所　武蔵工業大学付属中・高等学校
新築校舎内『同窓会の部屋』
（小田急線成城学園前駅下車徒歩10分）

●本校の歴史を展示（卒業アルバム・その他）
●進学・入学相談コーナー
●喫茶コーナー

上記同窓会企画の詳細は
同窓会事務局・清水（14期生）　TEL. 03-3595-0058

今年も全面新築された校舎で懐かしい先生、諸先輩、意外な方と出会いましょう。とてもモダンな空間、開放的な校舎、是非とも情報交換、歓談いたしましょう。生徒さんも展示も心機一転。定年退職された先生も集まっていただいています。お楽しみに！来年4月からは校名も変更となる予定で、現校名では最後の「柏苑祭」となります。

同窓会柏苑祭担当　清水（14期生）

「このままで良いのか？　戦後民主主義」

清水　茂　十四期（昭和四十二年三月卒）

もともと日本という国は、幸か不幸か島国であったことで、国境が地続きとして無く、外敵にも沖縄を除き侵略されずに、そこそこ国を戦火から守って来たのである。江戸時代からの鎖国もさることながら、幕府を頂点に諸国大名を手懐けながら、〝国盗り物語〟の如く内戦状況は経たものの明治時代以降、比較的平和を保ってきた。

昭和に入り第二次世界大戦勃発以前には経済的貧困ゆえに、口減らし政策の一環とはいえ、ブラジル移民・中国開拓団等国の政策のもとで、当時の一部マスコミも無批判に一役買って国外へと理想を希求したのである。

国民はといえば、一部の学者・研究家を除きいつも鎖国状況に置かれたがゆえに〝蚊帳の外〟が常態化。ナショナリズムの政治家と官僚、そして軍部が台頭し始め侵略戦争へと突き進んだのも昭和の年代である。

第二次世界大戦終結の切っ掛けとなったアメリカの〝原子爆弾〟の投下。ポツダム宣言受託により連合軍の名のもとに良かれ悪しかれ、アメリカに経済と軍事力（安保）を盾に支配されてきた。

敗戦と同時に連合軍（特にヨーロッパ）戦勝国の憲法学者・研究者・日本国内外の法律学者等が草案を策定し短期間にではあるが検討に検討を重ねて〝二度と不幸な戦争を繰り返さない・繰り返させない〟との反省と理念からGHQの承認を得て現在の〝日本国憲法〟が作られた。

この憲法の〝前文〟には、その崇高な〝誓い〟が込められている。最終ページに掲載していますので、もう一度私たちは国民として、吟味しながら熟読することをお勧めします。

当時は権力としての国（官僚・政治家）と軍隊との一方的な且つ独断的な行動に当時の一部を除きマスコミも無節操に煽ったといわれる。

現在のマスコミも少なからず、政府の〝毒饅頭〟を喰わされている様なので警戒しよう。

話を元に戻し、現在の〝日本国憲法〟は、当時の政府の独断的な行動を国民側が監視するためのものとして作られたものであると解釈して差し支えない。

しかし、昨今の政府は、海外からも羨やましがられるこの〝民主憲法〟を無神経にもおのずから白昼堂々違反しているのである。イラク自衛隊派遣を筆頭として、郵政民営化によるところの参議院での審議裁決が何故に衆議院解散に結びつくのか。合点が行かない。

〝数の力〟と〝メディア〟を活用した巧みなプロパガンダがこの国を有らぬ方向へと導いている。一部若年層の方々にはAV（視覚メディア）で育っているせいか、これには全く免疫がなく弱いのである。

〝議会制民主主義〟が崩れている。これらプロパガンダを駆使し、水面下では〝憲法改悪〟まで企んでいる。（国民投票法案を基に）

もともと我が国の〝民主主義〟とは映像メディアなどの先進国であるアメリカによって茶の間に与

えられたもので、ヨーロッパ先進諸国の様に幾度の市民革命により年月を経て国民がおのずから勝ち得てきたものではなく、戦勝国としてアメリカが持ち込み、何となく見た目に〝民主主義の様なもの〟という類のものなのである。

超高層ビル群を仰ぎ見たり、街角を歩けばオシャレなお店が有ったり他の先進民主国とは、外見上の判断では遜色ない様ではあるが。悪いことではないのであるが、経済成長ばかり考え、それに付随する様に公共事業ばかり発注し、『見て呉れ』ばかりに固執して、中身の伴わない、言い換えれば先進国気取りの国造りに邁進してきたのも宜なるかな。

国民生活本来の〝豊かさ〟に邁進することもなく、戦後半世紀以上を経て経済バブルが弾け早や二十年近くたつのである。少なからず『虚無感』が漂うのも私だけではないのではないだろうか。

話を戻し、国会審議では、一部の現政権の議員の方々においては、〝国民の為〟〝国民のご意見を聴きつつ〟とリップサービスに余念がないのであるが、現在の社会情況や報道を見る・聞くにつけ、〝どこが国民の為なのか〟が問われる諸問題が山積みである。〝地元有権者の為〟と言い換えたらよい。

社会保険庁の消えた年金問題（組織犯罪）やら、姥捨て（表現が良くない）後期高齢者医療の問題、消費税増税、道路特定財源確保、霞ヶ関埋蔵金、さらには派遣社員、食料自給率、農政等々不安要素がテンコ盛りである。

国民が頼んでもいないことを数の力で押し切る、族議員が堂々と跋扈している。これも政権維持の為だとしたら情けない〝公僕達〟である。

政治家（屋）と官僚・霞が関が全うな政治を怠り、税金で生活しているくせに自腹を肥やす。任せられた官僚は同様に自分達にとって都合の良い政策を遂行することに勢を出す。例をあげれば、大企業を優遇し、関連団体（独立行政法人等）に予算を配す。それぞれは〝天下りと見返り受注・認可〟を前提にである。

〝経団連〟とやらも業界の利益のためだけに族議員に対し種々の方法で政治資金規制法に引っ掛らない様細心の注意を払い、政治献金に余念がない。〝支持政党通信簿〟まで作る。選挙権も無いくせに。社会的責任など〝どこ吹く風〟である。〝政・官・財〟の癒着は極まれり。恥る心は何処へ行ったのだろうか。

日本の行政は〝縦割り〟であるとよく言われる。弊害が多すぎる。たとえば〝税金〟に例を取ろう。霞ヶ関各省庁間において、それぞれの省庁では予算獲得競争を予算編成時に毎年行う。予算獲得とは自分達省庁の利権を維持・温存するが為に、族議員とタッグを組み私たちの血税を貪ることなのである。（全ての予算とはいいません）

社会保険と称した年金行政も〝税金〟として国民から徴収するより〝保険〟と称した方が徴収しやすいらしい。実は社会保険も税金となんら変わらず、現在では税金よりも社会保険の方が企業と社員双方の負担になり、全体割合として大きいのが実情。減税された分が社会保険にとって変わっただけだ。許すことができない。財務省（法人税・所得税・相続税・消費税等）・総務省（固定資産税・地方消費税・市民税等）等縦割りをいいことに勝手に累進課税。サラリーマンの源泉徴収制度も〝愚民政策〟の一環として君臨。相当に馬鹿にしたものであり、さらに、税制度は恣意的に難解にして、納税者意識を芽生えさせないよう仕組まれたものである。もっと簡素化するなり、〝確定申告制度〟が世界の常識である。

これらは為政者（権力者たち）の悪知恵競争の賜ものであろう。余りにも徴収することに難解にしてきたためか、どこをどの様に手をつければ、税負担を軽減して景気全体が浮上するのかさえも分からなくなったのが現状なのである。今こそ〝納税者としての権利〟を叩きつけねばなるまい。

国会議員とは、国民の生活を強いてはそれらの将来に対し責任を持ち、〝生命の安全と財産を守る〟という国民からの負託を背負って議員活動を行うからこそ歳費として税金を充当しているのである。解釈は間違っていないと思う。残念ながら、昨今までの地元有権者は、国や自分たちを含めた全国民の将来を考えることではなく、集められた税金の散播きに飛びつくことや、地元企業さえ利潤をあげれば良いということではない筈なのだ。結局は優秀な地元企業は本社のある都市部大企業に買収され、法人税を都市部に搾取され、地元はシャッター街と化す。結果、自治体は大赤字。

地方は地方で霞ヶ関が策定した〝大型公共事業〟に付き合わされ、地元での独自の税収源も顧みずに、地方議会の議員も選挙の為、さら

編集後記

最近は、新聞を開けば公務員の不祥事の記事ばかりである。厚生労働省（社会保険庁）の年金問題、国土交通省は道路公団が民営化されたはずなのに相変わらずの税金の無駄遣い、防衛省に格上げされたばかりなのにイージス艦の事故等々、嘆かわしい限りである。

そのような不祥事が続くなか、着々と法務省では、変化が起きている。陪審員制度導入と裁判の短縮化（これは、市民の忙しさを考慮して提起されたのだが、どちらかというと検察側に裁判が有利になってしまう趣旨のものである）である。当局の力が増大して、あの忌まわしい時代に逆戻りしてしまわないように祈る次第である。憲法改正と言われているが、どうなんだろうか？現在、義務教育では、憲法の前文を暗記させられているが、ほとんどの読者は、忘れているのではないでしょうか？改めて吟味して読んでみると名文である。

●日本国憲法●「前文」

日本国民は、正当に選挙された国会における代表者を通じて行動し、われらとわれらの子孫のために、諸国民との協和による成果と、わが国全土にわたって自由のもたらす恵沢を確保し、政府の行為によって再び戦争の惨禍が起ることのないやうにすることを決意し、ここに主権が国民に存することを宣言し、この憲法を確定する。そもそも**国政は、国民の厳粛な信託**によるものであって、その権威は国民に由来し、その権力は国民の代表者がこれを行使し、その福利は国民がこれを享受する。これは人類普遍の原理であり、この憲法は、かかる原理に基づくものである。われらは、これに反する一切の憲法、法令及び詔勅を排除する。

日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであって、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めてゐる国際社会において、**名誉ある地位**を占めたいと思ふ。われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する。

われらは、いづれの国家も、自国のことのみに専念して他国を無視してはならないのであって、政治道徳の法則は、普遍的なものであり、この法則に従ふことは、自国の主権を維持し、他国と対等関係に立とうとする各国の責務であると信ずる。

日本国民は、国家の名誉にかけ、**全力をあげてこの崇高な理想と目的を達成することを誓ふ。**

どうでしょうか、りっぱな文章だと思いませんか？

なのにパブリック・サーバントである公務員（時に官僚）の情けない怠慢が続き、有耶無耶の内にことを運んでしまう政府（国民が選んだ代表）。ため息がでるばかりです。

山本氏は、私と高一の時に井桁先生担任の同じクラスで放課後一緒によく帰ったものです。私が弁当を食い終わったばかりの時に食堂へ誘いカレーライスをよく食べたものですが、それが祟ったのかおかげ様で二人とも今はメタボな体です。数学を社会に出ると必要無いと云う人がいますが、違うと思います。正しさの追求、論理的思考力を培うのには、最適な分野ではないでしょうか？高等数学になると芸術的趣向が必要となってきますが、世間では、1＋1は2しかないみたいな論理で数学を批判的に云う人がいますが、そうではない。ユークリッドの世界に基づく空間しか知らないと、平気でそういう事を言えてしまうのです。それは、日本国内にしかいたことがない人が、いきなり海外で、その地（風土）に適さないことを言って失態をさらすようなものです。数学の世界でも、1＋1＝1みたいな世界もあります。水＋水＝水、つまり水にいくら水を加えても水でしかないみたいな世界が数学にもあることを覚えておいて欲しいなと思います。これは、高等数学をやらないと判らないでしょうが・・・・・

出会いに関しては、高校時代に呼んだ藤原正彦の若き数学者のアメリカや岡潔の本等の出会いがあり、当時は無謀にも数学者を目指したりしました。

今回の校名変更ですが、学校側との信頼関係が形成されておらず〝情報〟が不明確のまま騙され不意打ちを食らったようになってしまったことを不甲斐無く思います。

日本国憲法の前文の自国を自分や自分の会社・地域と置き換えて読むと如何に現在の日本の社会が荒廃しているかが、判ると思います。これを解決するには、どうしたら良いか個々人がもっと真剣に緊張感をもって取り組むことが必要です。真剣に生きてますか？惰性の日々になってないでしょうか？

自分の視点・支点をしっかり持ってかつ実践・行動して欲しいと思います。

安藤　友二
（二十五期生）